様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３４５１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２１５０

研究課題名（和文）カントの批判哲学から晩年の思想への発展―『オプス・ポストゥムム』の全訳に向けて

研究課題名（英文）Kant's Thought and its Development from His Critical Philosophy to That of His Later Years: In Working towards a Full Japanese Translation of Opus postumum

研究代表者
田中　美紀子（TANAKA, Mikiko）

神戸女子大学・文学部・教授

研究者番号：８０７５９６１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：カントの未発表草稿群（ＯＰ）の初期の草稿の中では、『自然科学の形而上学的原理』(1786年）と重なる部分もあるが、また相異する物質論も展開されている。批判期以降のカントにとって形而上学的自然学から物理学への「移行」が重要な関心事であったことが明白となった。また、その「移行」は「エーテル」と呼ばれる物質の存在なしには考えられないことも判明した。さらに、カントが晩年に完成を目指した「自己定立論」と、「経験」そのものの成立に、「エーテル」の概念が重要な役割を果たすことが浮き彫りになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
十年以上前に完結した日本の岩波版カント全集（1999～2006年） にその抄訳すら含まれなかったカントの遺稿集（OP）を、本研究では部分的ではあるが、日本語で訳出することに成功した。その作業の過程で、カントの批判期（1781～1790年）から最晩年(1803年)に至る思想の発展を追究した。OPの全訳までにはまだ時間がかかるが、本研究が、日本においてＯＰ研究が発展していくきっかけになった。

研究成果の概要（英文）：Although Kant's ideas in some of his early drafts of Opus postumum (OP) are similar to those found in "Metaphysical Foundations of Natural Science" (1786), his theory of matter developed quite differently. The “transition” from metaphysical natural science to physics was an important theme for Kant after his so-called “critical phase” (1781-1790). Furthermore, this “transition” was not possible without the existence of the matter called “ether.” In addition, the idea of "ether" played an important role in his “theory of self-positing” as well as in his understanding “experience” itself which he tried to formulate in his later years.

研究分野：哲学

キーワード：カント　オプス・ポストゥムム　自然科学　批判哲学　認識論　自己定立論　物質論　エーテル

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

イマヌエル・カント（1724～1804 年）が死の前年まで書きためた膨大な断片や草稿は、プロイセン科学アカデミー版カント全集の第 21 巻（1936 年）と第 22 巻（1938 年）に遺稿集（いわゆる『オプス・ポストゥムム』、以下 OP と略記）として収められ刊行された。アカデミー版全集の OP の刊行後はまずヨーロッパで OP への関心が高まり、1950 年に ゲブランが仏語抄訳を、1963 年にはマチューがイタリア語抄訳を出した。さらに、ドゥケはスペイン語抄訳を 1983 年に発表し、マルティは 1986 年に新しい仏語抄訳を出した。その後ようやく 1993 年に、フェルスターらによる英語の抄訳がケンブリッジ版カント著作集の一巻と して刊行された。しかし、十年以上前に完結した日本の岩波版カント全集（1999～2006 年） には OP の抄訳すら含まれていなかった。

OP の中にはカントが自分の「主要著作」であると自負して公刊を計画していた『自然科学の形而上学的原理から物理学への移行』(以下『移行』と略記)という本の草稿群が含まれていたが、生前にその本は完成されなかった。この草稿群は、カントが主に 1796 年から 1803 年の間に書きつづった他の草稿群と混じりあって、そのすべてが彼の死後 13 の束に分けられ、アディッケスによる調査と校正を経て、ブーヘナウらにより編集された全集の二つの巻に合計約 1300 ページにわたり印刷され出版された。しかし各束は年代順にも体系別にも分類されておらず、例えばカントが最晩年に記した草稿が含まれる束は第一束として全集の当該巻の最初に掲載されている。この草稿群の編集の不備のために、日本におけるカント晩年の思考についての研究は、ほとんど行われてこなかった。

２．研究の目的

本研究はカントの OP の日本初すなわち世界初の全訳の完成を視野に入れ、カントの遺稿集を年代順、主題別に分類して精読しながら，批判期(1781～1790 年)から晩年にいたるカントの思想の変化と発展を、『純粋理性批判』,『判断力批判』,『自然科学の形而上学的原理』(以下、『原理』と略記）と OP を関連づけながら明確にすることを目的とした。

３．研究の方法

カントの批判期（1781～90）から OP に至る思想の発展の過程を、ドイツ語原文を読解しながら精査分析し、国内外の研究者の解釈を比較検討し、我々独自の解釈を提案した。方法としてはまずカントの遺稿集を年代順に分類し精読するべきテキストを選択した。そして本研究参加者各人に担当する分野のテキストを割り当てた。各人はテキストを精読し日本語の素訳を作りながら内容をまとめ、問題点を指摘し独自の解釈を行い、三か月ごとに開催された研究会で報告した。他の研究者も同一のテキストを読み研究会で素訳の是非を判断し、内容について議論を行った。そして、毎回記録を取りながら各課題についての本研究グループの見解をまとめた。

４．研究成果

平成 28 年度は計 4 回(28 年 4 月、8 月、12 月 、29 年 3 月）の研究会を開催した。まず翻訳の原本となる『オプス・ポストゥムム』のドイツ語テキストを選定し、翻訳分担を決定した。国内外の参考文献を収集し、研究動向を探ることも確認された。 そして、カントの未発表手稿の中の初期の草案である第 4 束の中の Oktaventwurf の試訳に着手した。主な論点は、物質の種別的性質、 熱素、エーテルの概念などであり、翻訳の推敲と内容に関する議論を進めた。続いて、OP の第 3 束の Entwurf A, B の試訳を作成し、物質の運動力および物質論についての内容を検討した。 平成 29 年 1 月にオランダから招聘した研究者は、「経験の統一」について 2 本の講演を行った。彼によると OP においてカントは、「経験の統一」を証明しようとする。こ

の経験とは、「一つの」経験のことであり、何が経験を作るのかが問題になる。そこで「経験の可能性」と「経験のために」という二つの用語が重要になってくる。しかも、経験を寄せ集めるのではなく、経験を体系づける役割を物理学（Physik）が担うため、自然科学の形而上学から物理学への「移行」において「可述語（Praedikabilien）」という中間概念が必要となる。自己を触発し、自ら経験をなす主体としての「私」が、新プラトン主義的意味で神とつながり、ひいては世界とつながると考えられ、このような経験の統一性の中に形而上学から物理学への移行の根源が認められるという。 OP の初期草稿は、『自然科学の形而上学的原理』(1786 年）と重なる部分もあるが、また相異する物質論も展開されている。「移行」の問題が批判期以降のカントにとって重要なテーマであったことが明白となった。

平成 29 年度には計 4 回(6 月、9 月、11 月、平成 30 年 3 月）の研究会を開催した。第 1 回、2 回および 4 回目の研究会では、昨年同様カントの未発表草案やメモを訳出し、内容について討議を重ね、翻訳を推敲した。 第 1 回目の研究会ではアカデミー版カント全集第 21 巻に収められている“EntwurfC”の試訳を行った。第 2 回目の研究会では同巻の“Entwurfß”および“EntwurfNo.1”、同 22 巻の第 10 束の試訳を行った。主な内容は、物質論、毛細管現象など自然科学に関するものである。11 月の第 3 回目の研究会では、アメリカから研究者を招き、講演会を開催した。講演のテーマは、カントの手稿の中でも比較的形の整った「移行 1-14」という草稿群の中に書き残された"Omnimoda determinatio est existentia”という文言であり、講演者は「汎通的規定」と「現存在」の置換可能的等価性について、『純粋理性批判』の「超越論的理想」の節でのカントの観点との相違あるいは発展について詳細に論じた。さらに、カントが晩年に完成を目指した「自己定立論」と、「経験」の成立に重要な役割を担う「エーテル」の存在論証との関連を浮き彫りにした。 第 4 回目の研究会ではアカデミー版カント全集第 21 巻に収められている“Entwurfγ”および“Entwurfδ”と同第 22 巻の第 7 束(自己定立論）の試訳を行った。

平成 30 年度には計 4 回(9 月、12 月、平成 31 年 1 月、同 3 月）の研究会を開催した。第 1 回、2 回および第 4 回目の研究会では、昨年同様、カントの批判期（1781 年から 1790 年）の超越論的観念論から、彼の晩年（1790 年代から 1803 年）の思想への発展を解明することを念頭に置きながら、カントが遺したメモや草稿集『オプス・ポストゥムム』を翻訳し、内容について討議を重ね、翻訳を推敲した。第 3 回目の研究会では“The Post-Critical Kant—Understanding the Critical Philosophy through the Opus postumum”（Routledge, 2015）という本の著者であるブライアン・ホール教授をアメリカから招き、神戸女子大学において講演会を開催した。彼は、彼の著作の中で、カントの遺稿集からさかのぼって、カ ントの批判期の哲学を読み直すという斬新なアプローチをとっており、そうすることによって批判期の思想における矛盾や問題点を浮き彫りにすることに成功したのだが、本研究グループは、彼のような画期的な研究から多くのことを学ぶことができた。 今年度は特に、『オプス・ポストゥムム』の本邦初訳の刊行として第十束の中からいわゆる『自己定立論』に関する部分を抽出し、それを訳出し、訳者による解説と注釈を付けて翻訳文を大学の紀要に発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　２　件）

高畑祐人(訳): エルンスト・オットー・オンナシュ『オプス・ポストゥムム』における形而上学の物理学への移行　(Die Tendenz der Metaphysik zur Physik im Opus postumum),

『哲学と現代』第 33 号(Philosophy and Contemporary Society, Vol. 33), pp. 200-216, 名古屋哲学研究会編集・発行, 2018 年 2 月

内田浩明・田中美紀子（共訳）カント『オプス・ポストゥムム』、第十束、第十九紙葉、一頁 - 四頁（AA XXII 409.11-421.30)、神戸女子大学文学部紀要　第 52 巻、143-157、2019 年 3 月、査読有

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　1　件）

牧野英二編、『新・カント読本』(加藤泰史『オプス・ポストゥムム』のコンテクスト―遺稿著作はカント最晩年の思想か?)、法政大学出版局、2018 年、248-264.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：加藤泰史

ローマ字氏名：　KATO, Yasushi

所属研究機関名：一橋大学

部局名：大学院社会学研究科

職名：教授

研究者番号（8 桁）：90183780

研究分担者氏名：内田浩明

ローマ字氏名：　UCHIDA, Hiroaki

所属研究機関名：大阪工業大学

部局名：工学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：90440932

(2)研究協力者
研究協力者氏名：犬竹正幸、中澤武、高畑祐人、ヴェルナー・シュタルク
ローマ字氏名：INUTAKE, Masayuki・ NAKAZAWA, Takeshi・TAKAHATA, Yuto・Werner STARK

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。